法隆寺百萬塔の調査

孝謙女帝が藤原仲麿呂の乱後に造らせたといわれる百萬塔は，完成後，大和を中心に十大寺へ分置されたが，今では斑鳩の法隆寺にのみ伝世していることはよく知られている。

このたび，法隆寺が企画している『昭和資財帳』作製のための文化財調査に，当研究所も協力することになった。そこで，平城宮跡発掘調査部考古第一調査室では史料調査室の協力を得て，この百萬塔の調査にあたることになり，1982年８月から，毎月２～３日ずつ，同寺聖徳会館へ出向き調査をおこなってきている。いま法隆寺に残る百萬塔は，４万３千余基といわれるが，このうち百基が明治年間に今日でいう重要文化財に指定されており，他は昭和６年頃に，数十個の木箱にわけて梱包されたまゝ，本坊内の蔵に納められていた。木箱には特等・甲・乙・丙という墨書があり，小塔の遺存状態別に仕分けられている。

調査はまず塔身部から実施することとし，それ専用のＢ４版調査カードを作製した。調査は赤外線テレビやＸ線機器などを導入しておこなった。これまでに判明した事実は以下のようである。１　三層ある笠のいずれかの部分が製作途中に破損し，別材を接合したり漆で補填した補修の痕を残すものが９割以上も占めている。２　塔身部底面，まれには笠上面や相輪部底面に墨書銘が比較的よく残り，製作年月日・工人名などが判読できるものが多い。３　塔身部底面にある轆轤挽きのための爪痕には，従来知られている以上に多くの違った配置をとるものがあり，これと工人名とが一致するものもある。今後，これらのデーターの蓄積に合わせてコンピューターに入力し，往時の工人組織等を復原することを目指している。　（工楽善通）

百萬塔Ｘ線写真と基壇底面の墨書（上部から撮ったＸ線写真では補修のため木目が交叉しているのがわかる）